

私のモチーフ

古代讃歌

会員 小材 啓治

国内の装飾古墳数は六五七基を数え、九州では三六七基と全国の半数以上が集中している。また、熊本県内の装飾古墳は一九六基と全国で最も多く、特に私の住む菊池川流域には装飾古墳が数多く集中し、一一七基が確認されている。全国第二位の数の福岡県の装飾古墳が七一基ということから見ても菊池川流域にいか

に集中しているかがわかる。県立装飾古墳館もこの地（山鹿市）に建てられた。

装飾を施す古墳は四世紀から始まり七世紀まで九州北部を中心に広がった。初期の装飾古墳は、石棺の内外に円文などを装飾していたが、やがて正方形の石室の壁にも装飾を施すようになった。更に阿蘇熔結凝灰岩など割と軟らかい岩肌

に穴を穿った横内基の内や外に線刻や彩色、浮き彫りの装飾を施すようになった。横穴基が多く作られるようになった。熊本県の六割が、この横穴



▲ 鍋田横穴古墳実景

古墳で占められている。

熊本県内、特に菊池川流域に装飾古墳が集中する理由のひとつは、約九万年前の阿蘇の大噴火時に火山性噴出物が堆積してできた阿蘇熔結凝灰岩が豊富にあることと推察される。

阿蘇熔結凝灰岩は、表面が多穴性

であることから、塗られた顔料が染み込み、一五〇〇年経過した現在も鮮やかな色彩が残っていると考えられる。

このような装飾古墳地帯にいる私は、装飾古墳をモチーフにできないかと考えてきた。彫り込まれたレリーフの素朴さ、抽象模様の斬新さ、風化した岩肌の魅力。それを基にして、古代の人達の祈りみたいなものを表現できないか。

古墳群は近いので、あちこち回りスケッチや写真取材をしたが、彩色された有名な古墳は年二回の一般開放の時だけ、それも湿度管理されているのでガラス越しに見ることになり、顔をガラスに近づけても見えにくい。やはり、絵をかくには実際見ることで

なければ難しい。

そこで、常時見ることが出来る横穴基をモチーフにすることにした。横穴基は数多くあるが、鍋田古墳と長岩古墳は、装飾が割と残っている



▲ 古代讃歌



▲ 鍋田古墳スケッチ



▲ 長岩古墳スケッチ

のものが何とか形態を残している。現地に行ってみると凝灰岩とはいえ堅い岩壁に大きく深く穴を穿つことができたものだと感心する。葬られる人がまだ生きている時から仕事が始められたのだろうか。当時の死生観はどのようなものであったのだろうか。日常の生活は、と想像は尽きない。

横穴基の内部に入ると何となく気



▲ 天然顔料による絵

持ちが落ちつかない。内部の岩肌は魅力的であるが彩色を判別することは素人目には難しい。考古学者によると、ベンガラ、赤土、木炭、白土、黄土、緑土など使われていたという。



▲ 横穴長岩古墳実景

菊池川流域の装飾古墳は岩肌に直接彩色したもので、鹿の毛をハケ状にしたもので彩色したようである。時代が新しい高松塚のフレスコ画的表現とは異なる。そのため顔料が永い歳月のうちに剥離しても岩肌の色と調和して自然である。だが、私のモチーフとした横穴基は、その顔料の色は見えにくい。

どのように彩色していたのか体験しなかったもので、県立装飾古墳館の「古代絵のぐで絵をかこう」に参加、凝灰岩のプレートに天然顔料で彩色する面白い体験ができた。

九州北部の装飾古墳は、装飾性が強く、細やかで色も鮮やかである。それに比べて菊池川流域のそれは、素朴で幼稚である。私はこのプリミティブなレリーフや装飾にひかれて



▲ 赤い馬のいる古墳